

## 「ことばが気になる子どもへの対応 歯科医師と言語聴覚士の連携」



大阪大学歯学部附属病院 顎口腔機能治療部  
言語聴覚士 主任

杉山 千尋 (すぎやま ちひろ)

1997年 大阪外国語大学外国語学部国際文化学科  
言語情報専攻 卒業  
1999年 神戸総合医療介護福祉専門学校医療言語聴覚士科  
卒業  
大阪大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部入局  
(研究生)  
2000年～ 大阪大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部 勤務  
現在に至る (言語聴覚士主任)

大阪大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部では開設以来40年以上にわたり歯科医師と言語聴覚士の連携のもと小児の言語障害、特に音声言語 (Speech) の治療を行っている。「こどものことばが不明瞭だ。きっと口に関係があるから、歯科で相談しよう」という親の気持ちは非常に自然なものである。また、医科や療育施設から発音不明瞭と口腔の関係の精査を依頼されることも多い。そのような相談や依頼を受けるたびに、「口腔機能の専門としての歯科」としての社会的な期待を改めて感じる。

こどものことばの不明瞭さについて適切な診断と治療方針を見出すためには、口腔機能に熟知するだけではならず、口腔機能と言語がどのように関わるかを理解する必要がある。小児の最大の特徴である発達を軸に据え、口腔機能の専門家である歯科医師と言語発達・言語機能の専門家である言語聴覚士が、双方の知識を提供しあい、相互に学び合いながら、それを実現していく。これが歯科における小児の言語治療のユニークな点であり、醍醐味でもある。

舌小帯短縮症を例に挙げる。舌小帯の短さと舌の運動範囲の異常は構音操作にどこまで影響しているかは、実際にこどものスピーチを分析した結果と照らし合わせて初めて見えてくる。スピーチ時の舌操作は可動域に見合ったものか、あるいは代償的な動きはないだろうか？まだ正しく出せない音は？あるとしたら、それは発達的に許容される範囲内だろうか？

また、近年では舌小帯や口蓋裂のような器質的な問題をもつ子どもだけでなく、「動きが不器用な子ども」に出会うことも増えた。そのような子どもたちにも歯科として何ができるか、試行錯誤の日々である。講演では言語や Speech の獲得についての事項と合わせて、毎日出会う子どもたちから我々が教わったことを皆様にお伝えしたいと思う。